

玉川上水の奇跡 「ひとくい川」



(多摩川台公園 多摩川八景)

{多摩川 (多摩川台公園) →羽村堰→玉川上水 (久我山、高井戸、四谷大木戸)} を歩く

安富六郎

2016年10月29日



玉川上水の奇跡、ひとくい川

まえがき

小学校の1940年代の頃、杉並久我山の近くの玉川上水を、よく、「ひとくい川」と言い、ここで遊んではいけないと、教えられたものだ。静かに流れているが、なぜか、人が落ちれば浮かび上がらないそうだ。恐ろしいカップか妖怪のいるのだろか。当時この周辺には麦畑、工場はあったものの、寂しいところと記憶している。今は上水に沿って家も密集し、当時の面影はないが、それでもやっぱり懐かしい場所である。

ところで、これから話そうとする話は、現在の玉川上水を歩き、まさに足で書いた一つの「おはなし」であり、エピソードであり、多くの推論も含んでいる。長さの関係で8つに分割されている。写真が多いので、本来の「電子耕」には掲載できないので、ここに載せてもらうことになった。ご批判、ご感想を賜れば光栄である。読まれる当たって『東京地図』を用意されると役に立つ。

なお、この内容は山崎農研現地研修会(2016.10.29.)での話に加筆したものであり、農研所報『耕140号』に掲載される予定である。



第一話

1. はじめに

江戸時代の関東平野の台地の上水・用水は多摩川からの玉川上水に始まる。玉川上水および、その分水路は武蔵野台地の農業や文化を發展させ、我が国の近代化にも大きく貢献してきた。現在は本来の機能を全うし、遺跡となったが、文化遺産としての価値は極めて高いと思われる。なかでも玉川上水の技術的な核心部分は、三鷹、井の頭、久我山に見られる俗称「ひとくい川」に凝縮されているようだ。多摩川からの取水の施設、遺跡などを一つひとつ訪れ、農業技術的分野から多摩川、玉川上水を見ると、いままでと違った姿が浮かび上がってくるのである。

都市の近代化が進み、それらの遺跡すらも消滅しつつある今、玉川上水が江戸、武蔵野の農村の文化のみならず、日本の近代化にも寄与した足跡をたどり、在りし日の栄光を一瞥し、これからの地方創生、新しい文化の發展に寄与出来ればと思う。これらを地域文化の發展に利用出来るか、その可能性を問いたいと思う。

2. 武蔵野台地利水の特徴

多摩川の多くの利水の記録、上水・用水に関する資料を見る限り、詳細な観察、報告に驚くのであるが、不明なことも少なくない。特に施工技術の継承については、曖昧なことが多く、推論には慎重であり、踏み込んだ私論を述べたものはごく少ないといえる。今ここで述べる事柄には、遺跡や現存する水路を基に、工学的な視点から大胆な推論、解釈をしたものが多いが、探偵小説的なアドベンチャー的性格も強く持っている。ぜひ、ここに描かれた実像、虚像を批判的に理解され、反論も含め、新しい科学の芽を見いだせれば、また加えて、水辺の歩きの楽しさを覚えれば、幸いである。

玉川上水は、幕府の命によって武蔵野台地に短期間で、一挙に技術的に完璧な姿で実現されたものではない。そこに至るには、多くの先達の失敗や教訓を学びつつ、水利技術の蓄積の結果であるに違いないと思われる。このことから、玉川上水を見るまえに、まず多摩川全体の灌漑、水利施設などを一瞥することが、大切である。



写真1 武蔵野台地の水系

武蔵野の水利開発は、おそらく江戸幕府最大の政策の一つであったはずであり、徳川家康が神田川、石神井川などの小河川開発に力を入れたことから、多摩川の台地利水を早くから夢見ていたことは想像に難くない。だが、広大な武蔵野台地は従来の水田地帯のような平坦な沖積地ではなく、谷地、河川が組み合わさった複雑な地形にある。この広い台地上に延長40km以上の水路を設けるには、従来の水田開発とは異なり、河川や地域の水利特性、広域の地勢、細部にわたる高低の情報が必要である。これは難題である。

江戸時代、幕府による多摩川の、大がかりな水利開発は河川下流から始まっている。まず、家康は武蔵の国であった相模の二ヶ領(川崎、稲毛)の水田開発に二ヶ領用水をつくった。これによって水田の生産力は飛躍的に増大した。ほぼ同じ時期に、対岸(左岸)に羽田周辺の水田灌漑網、六郷用水を開削した。この2計画に家康の能吏、小泉次大夫(こいずみ・じだゆう)が大きな役割を果たした。この技術者が羽田周辺の水田灌漑を計画し

たとはいえ、武蔵野台地への灌漑を見逃すわけではない。この六郷用水こそ、台地灌漑への試みのはじまりのように見える。台地灌漑は実現しなかったが、取水堰の羽田からの距離、その水路選択、水田分布や地形などを総合し、状況証拠的思考から台地への灌漑を夢見ていたことを窺わせるのである*)。

武蔵野台地全体の主要水路網を写真1に示す。水路は、多摩川左岸の武蔵野台地に青梅・羽村を要に、扇のように広がる。地形にしたがって、玉川上水、野火止用水、青山上水、用水は台地を潤し、野川、千川、善福寺川、妙正寺川などの河川は低地を流れる。さらに、これらの水路に道路がどのように関わっているかも重要である。

武蔵野台地は多摩川と荒川に挟まれた、関東ロームに覆われた洪積台地である。台地開発の最大の難は取水にある。武蔵野には深井戸に頼るようなススキ野、松林の群生した台地、低地には小河川とわずかな水田、小集落が点在するのみで、用水が台地を写真1のように潤したとは言え、台地全体の土地利用はきわめて遅れた状態にあった。このような光景は、最近まで首都圏内でも見る事が出来たと思われる。

つづく

*) 拙著『武蔵野江戸を潤した多摩川』p27 農文協参照
